

第1回：パキスタンの自然と農業

国際耕種株式会社は、農業分野における開発調査を中心にパキスタンでの技術協力活動に関わり合ってきた。従って、これまでも何回か AAINews の中でパキスタンの報告をしている。パキスタン全体から見れば、我々の経験はほんの一部の地域に限られているが、本シリーズでは乾燥地域における農業開発はいかにあるべきかという視点に立って、これらの地域の自然とそれぞれの特性を利用した農業形態そして今後の課題について考えてみたい。

パキスタンはアラビア海から中央アジアの山岳部まで広がり、イラン、アフガニスタン、中国、インドと接しており、国土面積は日本の約2倍の79.6万・である。地形的には北部山岳地帯、パンジャブ・シンド平原、バルチスタン台地の3地域に区分される。北部は急峻な山地で、西からヒンズークシ、カラコラム、ヒマラヤと続く世界の屋根の一部を形成している。パンジャブ・シンド平原はインダス川とその支流によって形成されている平原であり、全長64,000・に及ぶ世界最大と称される灌漑システムが発達している。バルチスタン台地は、インダス川の西側を南北に走るスライマン山脈と多くの帯状の小山脈よりなり、イラン高原の東翼を形成し、広大なが人口密度の希薄な地域である。

パンジャブ・シンド平原はパキスタンの穀倉地帯を形成しているものの、この地域の年間降水量は500mm以下で乾燥・半乾燥地帯に属している。そのため、パキスタンの農業にとって最も重要な要素は灌漑であり、下図に示すように灌漑用水の種類によって5つの農業地域に区分されている。ここで、ゾーン1は河川灌漑が全耕地の50%以上、ゾーン2は河川氾濫の利用が全耕地の50%以上、ゾーン3は溜池・カナートによる灌漑が全耕地の50%以上、ゾーン4は天水農業が全耕地の50%以上を占める地域となっている。また、ゾーン5は、ゾーン1からゾーン4が混在している地域である。パキスタンにおける農地の灌漑率は、アジア地域ではすでに最高の水準に達している。また、小麦、米、綿花、サトウキビ、トウモロコシ等の主要作物についても、これまでに栽培面積・単位面積当たりの収量共に拡大・改善されてきた。従って、今後は作物の増産、果樹、畜産の導入による営農収入の増大を目指し、多様化営農を振興することが重要な課題となっており、そのためには地域の自然条件の特性を利用した農業開発が合理的であると考えられる。

